



TITLE:

雑纂

AUTHOR(S):

---

CITATION:

雑纂. 日本外科宝函 1938, 15(2): 252-254

ISSUE DATE:

1938-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/204920>

RIGHT:

在外荒木講師通信 (昭和13年2月1日着)

鳥 潟 先 生 侍 史

1 月 13 日 在 巴 里 荒 木 千 里

巴里の生活も愈々今日で終つて明朝からスイス、伊太利への旅へ出ます。スイスはベルンだけに寄るつもりです。今度の旅行は病院見學は一切しないで全くの見物旅行のつもりですが、ベルンは先生も、老伊藤先生も永く勉強された土地で京大外科には因縁の深いところだと思いますので、その意味で一寄るつもりです。病院も外から位は覗いて見ます。ミラノ、ベネチア、ボロニヤ、フイーレンツェ、ローマ、ナポリと旅行して1月30日に船にのります。船は白山丸、神戸着3月4日の豫定であります。

巴里の外科は一通り全部見ました。併し年末年始にかゝつた爲に充分な効果をあげ得なかつたことは残念です。

御承知の様に巴里大學醫學部には附屬の綜合病院として一つの大きな大學病院があるのではなく、市内各所にある公立病院が皆巴里大學に屬して居り、アチコチに教授が散在してゐますので見學には不便です。いはば各公立病院の部長の中の優秀な人を教授に囑託したといふ形です。外科關係の教授について云へば、

一 般 外 科

*Cuneo*; Hôpital Hôtel Dieu, *Gosset*; Hôspice de la Salpêtrière, *Grégoire*; Hôpital st. Antoine, *Lenormant*; Hôpital Cochin, *Duval*; Hôpital de Vangirard,

整 形 外 科

*Mathieu*; Hôpital Cochin

小 兒 外 科

*Ombrédanne*; Hôpital des Enfants Malades.

泌 尿 外 科

*Marion*; Hôpital Neckeu

肺 結 核 外 科

*Bezançon*; Hôpital Laënnec

といふ具合です。

神經外科には教授はありませんが、専門にやつてゐる人が3人居ます。

Vincent; Hôpital de la Pitié, de Martel; Hôpital privé de Dr. de Martel. Petit-Dutaillis; Hôpital de la Salpêtrière 全體としての感想(一般外科)は、手術の患者が少いといふことです。米國や獨乙と違って1週2—3回の手術で而も毎回2—3の手術しかありません(尤もこれは時期が悪かつた所爲かも知れませんが)。従つて色々な例について各論的に見學するには時日が足りませんでした。併し私の見ただけから云へば『手術技術的には他國と一寸異つてゐますけれども術式的にはあまり變つたことはない』と思ひます。換言すれば『佛蘭西に獨特な手術々式は少い』といふことです。これに對する例外は恐らく Ombrédanne の小兒外科と Leriche の交感神経外科とでありませう。私の感想ではこの兩人が現今佛蘭西外科で最も特色ある存在だと思ひます。尤も Leriche は實際に見た譯ではないのですが、米國滯在中に讀んだ業績やら近著“La Chirurgie de la Douleur”から見て、思ひつきはいゝけれどもどうも考へ方が少し粗過ぎる感がある様です。

Ombrédanne は歐洲へ來た人なら是非一度は見る必要がありませう。從來あまり日本へ紹介されてゐないのを奇異に思ひます。この人の著書“Precis clinique et opératoire de la chirurgie infantile”は各所にこの人の創意を盛つてゐる様に思ひます。これに比すれば Gosset などは日本で有名になつてゐるに拘らず、實際手術を見ても亦その著書“Techniques chirurgicales”を見てもこの人の獨創と認められるものは甚だ貧弱です。

併し各教授とも60を越したと思はれる老人ばかりなので手術の手は慣れてゐて矢張り大家の手術だと思ひます。

手術技術的に云つて佛蘭西の外科が一般に器械及び人手を使ふことが非常に少いのは面白いことだと思ひます。これは人によつて多少の相違はありますがその最も代表的なものは Marion でせう。この人は數にして10を越すまいと思はれる僅かな器械と1人の助手とだけで(看護婦は手を消毒せず)、照明燈も使はないで腎臓出を15分位でやつてのけます。こんな手術を見ると『器械がないが故に、人手が足りぬが故に大きな手術が出来ない』などいふ言譯が全く成り立たぬことを感じます。器械も割に classical な簡單なものです。簡單なるが故に却つて人手が掛らぬとも云へませう。人手が充分にあるのに態々こんなにやらねばいけないか如何かは色々議論もありませうが、とにかく簡単にやらうと思へばいくらでも簡単にやれるといふことを知つて置くのは必要でありませう。

元來新しい器械を考案する方向は2つあると思ひます。1つは用途の廣い即ち何にでも使へる便利な器械を考案すること、他は1つの特殊な用途に向つて特に便利な器械を考へること即ち器械を spezialisieren させることであります。前者の場合には器械臺の上の器械の數は次第に少くなることになり、後者の場合には器械臺の上は益々混雜して來て1人の看護婦では足りず看護婦を2人も手を洗はせるといふことになりませう。前者の傾向を取つて居るのが佛蘭西の外科で後者の方向に向つてゐるのが獨乙の外科ではないでせうか。佛蘭西でも de Martel の

様な例外が居ますが一般的には上の様なことが云へませう。de Martel の考へる器械は仲々面白いものが多いと思ひます。Kirschner と大體傾向が似てゐますが後者よりは de Martel の方が頭がよい様です。彼も矢張り一種の天才でせう。尤もこの人の脳外科は米國で不評であつた様にいゝ脳外科とは云へません。唯頭を開けることだけは非常に上手ですので、脳外科を知らない人の眼には上手に見へませうが、頭を開けてから先きのやり方が駄目です。多數の日本の外科醫がこの人の手術を見に行きますが、實際彼が腦腫瘍を剔出するのを見た人が非常に少いのはこの邊の消息を物語るものです。

de Martel に對して Vincent の脳外科は Cushing 直流の正統派の手術です。尤も Cushing に似過ぎて多少愚圖の傾向はありますが、元來この人は神經病學者で外科醫者ではないので、この人の手術振りには全然佛蘭西一般外科の影響はありません。患者も仲々多いと思ひました。この人は學問がありますので、色々新しいことを考へて居り、歐洲では尊敬すべき神經外科醫です。も一人の神經外科醫 Petit-Dutailis は Gosset のところの助教授で將來神經外科として獨立するらしいのですが、現在は患者も少く、手術も下手でこれは問題になりません。この人も大體米國流の手術をします。米國でミツチリ勉強してから歐洲へ渡つて見ますと、脳外科に關しては現今『米國の脳外科が全世界を風靡してゐる』といふことがハツキリわかります。これは恐らく一時の流行ではなくて矢張り米國の脳外科を『正統派の、或は規準的の』ものと見做すべきだからでありませう。それにしてもこれ迄脳外科建設の中心人物であつた Cushing は偉いと思ひます。寒さがつるにつれて Cushing の足は痛んでゐるであらうと想像し、その健康を祈つて已みません。9月に Cushing に會つた Bailey の話では當時見違へる位に憔悴してゐたといふことでした。猛烈な喫煙家で、煙草は足に悪いと注意され、自分でも充分に承知してゐながら、どうしても禁煙することが出來ず、『足に悪いのは煙草自身ではない、巻煙草の紙が悪いのだ』と屁理屈を云つて近頃は「パイプ」にしてゐるといふ話を聞き、喫煙の好きな私としては一種哀切の情をそゝられます。

私の在外研究もこれで全く終りました。私としては自身に出来るだけのことは不充分乍らもやつたと思ひます。今や身も心も軽く明日の旅へ出ます。

私にとつて測り知れない程有益であつたこの在外研究の機會を與へて戴いた先生に對して厚く厚く御禮申します。どうぞ御身體を御大事にして下さい。

今回の京大事件のことも薄々知つてゐます。それにつけてもこんな事件が起つたからとて少しも心配の要らない先生をもつたことをどれ程嬉しく且つ心強く思つてゐるか知れません。御自愛を祈ります。

CH. ARAKI  
chez Maison du Japon  
Cité universitaire  
PARIS